

る事にて、御當家國初にも、桂の里の桂姫、美濃の大柿をはじめ、いさゝかの言葉に吉凶をはからる、例不可勝計、

〔茅窻漫錄上〕和漢異年號

此邦改元ある時に、難陳といふ事あり、年號文字の義理出據などを吟味し、善惡是非を難し陳ぶといふ、其時易經の語を引くには、書名をいはず、或文に曰と書くは故實にて、變易變化を忌み嫌ふなりと、然るに近歲にも化字を用ひて紀元ありしは、いかなる事によ

○按ズルニ、易經ヲ引クニ、書名ヲ或文曰ト書スルコト、他ニ證據ナシ、各家ノ勘文ニハ、皆周易ト書シ、書名ヲ忌マザルガ如シ、

〔改元部類〕權記、寛弘九年十二月廿五日戊子、今日以後四箇日物忌也、然而依外記度々誠參内、左大臣參入被定年號事、大臣及中宮大夫、右大將、尹左兵衛督、修理源相公被參、頭中將下文章博士宣義通直等勘申年號一枚、太初政和等也、定申云、件字共非優、但勘申之中、長和頗宜歟、抑勘本文非便年號字、然而自太初政和頗宜也、僉議同之、被奏宣下、大臣召大内記爲清、被仰詔書可作、由此間余原行藤退出、太初、漢武帝年號、此年十一月朔旦冬至也、今年有朔旦、彼年戊子、今年又戊子、依彼例所勘申也、前秦西秦共有此號、南涼又有之、件年號前秦九年、即爲姚興所滅、西秦廿一年、年歷雖久、僞主代無

殊事、非可庶幾、南涼三年、歷甚少、又武帝之時、非亂代、其例可因准、然而彼年柏梁臺災、庶幾彼年之例、亦甚無爲、紀云、太初元年應劭曰、初用夏正、八、正月爲歲首、故改年爲太初、十一月甲子朔旦冬至、乙酉柏梁臺災、夏五月正曆、

八、正月爲歲首云々、二年春正月戊申、丞相石慶薨、十二月御史大夫□□寬卒、又後漢質帝、太初元年六月、爲梁冀所殺、政和禮記文云々、有毛詩關雎篇序云々、然而政字、秦始皇名、可嫌之、唐家本朝以

政字爲年號之事、唯有後周宣政一年、不可用歟、

〔水左記〕承曆五年二月十日、被下年號勘文三通、臣一通左、大辨實政卿勘申嘉德、一通有綱朝人々令申、元德、一通行家朝臣勘申嘉德、永保、永長、應德、